

# 国立極地研究所の立川移転とアーカイブ

神田啓史 極域科学専攻・国立極地研究所

---

平成 21 年 5 月 1 日、国立極地研究所（以下極地研）は、板橋区から立川市に移転した[1, 2, 3, 4]。昭和 48 年(1973)9 月 29 日、極地研が板橋区加賀に設置されて以来、36 年の歳月を経て、極地研の板橋時代が終わった。この機に板橋時代に集積した資料を収集、選別し、目録作成して永く保存することは、極地研の研究に対する歴史的評価と社会に対する説明責任を果たすことにもつながる。立川移転という新しい時代の幕開けは、同時に、それ以前の歴史的資料をどのように扱うかの課題も含んでいる。とくに、移転を機会に重要なアーカイブ資料が散逸してしまうことがごく普通にあり、この時点で何らかの対策を講じる必要がある。これはすでに移転を経験している組織の共通した忠告でもあった。

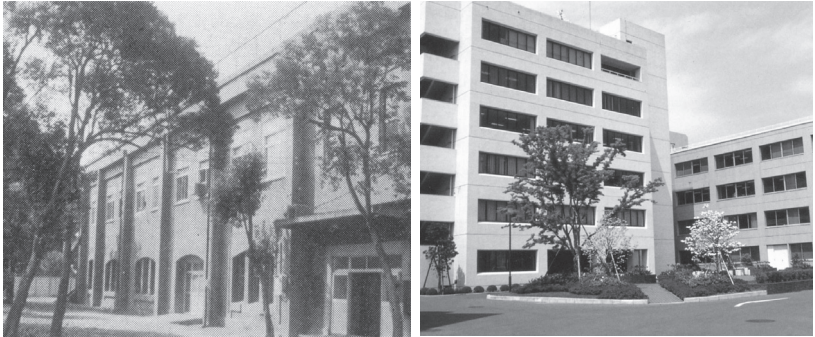
極地研は移転前の緊急課題として、所長室会議ワーキンググループ「移転に伴う文書、物品のアーカイブ取り扱いの検討グループ」を設置し、対応していくことが決定された。ワーキンググループのメンバーは、副所長、管理部長、事業部長、総務課長、会計課長、図書室長、広報室長他、関連教授であり、それはアーカイブが単に研究、観測にかかわるものばかりではなく、研究所を管理している部署の文書類、機器類が対象になる等、研究所の管理運営の問題に関わることがあったからである。

我々が考えていた、移転時で扱うアーカイブとは、極地研や個人が研究活動の過程で生み出した記録物あるいは研究機器等のうち、その組織体や個人並びに社会にとって情報価値や証拠価値があるために、永続的に保存、活用される物をいっている。文書、出版物、図版、音声、映像、

## 第1章 基盤機関アーカイブズの構築

写真、電子記録まで媒体の如何を問わない広範な資料を意味している。

極地研の板橋時代に収集したアーカイブについては、すでに、「共同利用機関の歴史とアーカイブズ 2008」の中にまとめている[5]。



板橋時代の国立極地研究所 左：旧造兵廠の建物を利用した極地研（板橋、1970年頃）右：管理・資料棟と研究棟（右奥）（板橋、1990年代）

### 極地研設立の歴史

極地研設立の歴史は「国立極地研究所 25年のあゆみ」[6]に見ることができる。しかしながら、歴史というよりは沿革がやや詳しく紹介されているに過ぎない。今日、板橋からの移転を機に、極地研のアーカイブ収集活動がやっと始まった段階であり、これからが本格的な歴史研究が開始すると考えている。ここでは、「国立極地研究所 25年のあゆみ」を中心に、極地研設立の沿革について簡単に紹介しておきたい。

極地研の歴史は南極地域観測事業の推移と深く関わっている。南極観測事業は国際地球観測年の(IGY)を契機に1956年に開始され、1960年9月の閣議了解により第6次観測をもって終了したが、それを契機に日本学術会議は1960年5月に「資料の整理、保管、研究に関する恒久的機関」、更に翌年の1961年5月、「極地研究所（仮称）設置について」を政府に勧告した。一方、南極地域観測の実施によって得られた資料の整理、保管、研究等は、南極地域観測統合推進本部（南極本部）によって検討さ

れ、1961年3月に「南極観測将来問題小委員会」が発足した。文部省は、これらの勧告や要望を受けて、所管の国立科学博物館に極地学部を設置した。同時に進行していた南極観測再開が、1963年8月の閣議において決定され、1965年の再開（7次隊）に向けての準備が進められた。南極本部は1964年5月の総会において極地学課を拡充して、科学博物館に「付属極地研究所」の設置を決定したが、予算は認められず、極地学課が極地部に、また翌年4月には極地部が極地研究部に改組されたのみで、研究所の実現はならなかった。

1969年6月、学会会議の南極特別委員会は「極地研究所」の設立に関して、「研究所は相当数の研究者を擁して極地に関する科学研究を行い、かつ得られた試資料を整理・保管すると共に、各分野の研究者に提供する共同研究の性格を整える必要がある」との見解を示した。学会会議は、当初から「極地に関する科学の総合研究及び極地観測」は科学博物館における研究とは異質な面があり、そこでは研究体制の整備が期しがたく、また、長期計画に基づく高度な研究には国立大学等と幅広い交流が必要である」との考えがその見解の理由であった。

翌年の1970年度予算に3カ年計画の「国立極地センター」の設置が要求され、1970年4月極地研究部は「極地研究センター」に改組された。このセンターは、極地事業部、極地研究・資料部、事務室からなり、極地観測職員、合計46名で構成された。この組織をもって極地に関する科学の調査研究、資料の収集・保管・利用、南極観測の事業計画案の作成、観測隊編成の準備を行うものであったので、この時点で現在の極地研究所の原型が作られたといってもよいだろう。同年8月には、センターは上野から東京都板橋区に移転した。1972年に、研究系、資料系、事務系の50名の規模になり、1973年9月29日、文部省所轄の国立大学共同利用機関として国立極地研究所が設置された。これは、研究所設立の最初の勧告から12年後に当たる。

極地研は、設立以来、総合研究大学院大学を構成する研究所、大学共同利用機関法人情報・システム研究機構を構成する研究所として歴史を

## 第1章 基盤機関アーカイブズの構築

刻んできたが、極地研は当初からアーカイブ事業の重要性を考え、真っ先に資料の収集、整理、保管に取り組んできた研究機関といえるかも知れない。



板橋の国立極地研究所 左：大気・雪氷実験室(研究棟4階) 右：低温庫(研究棟地下)

### 立川移転の経緯

立川移転に関しては、移転が閣議決定されてから立川移転までに実に21年を経過している。これも移転に纏わる歴史研究に値することと考えられる。ここでは立川移転の略歴を紹介する[7]。

昭和63年7月に、閣議決定「国の行政機関の移転について」により、極地研は統計数理研究所（以下、統数研）、国文学研究資料館とともに、東京都区部から移転することとなり、平成元年8月「国の機関等移転推進連絡会議」において立川市が移転先の候補地となった。平成3年6月の同会議において、具体的な移転場所は立川基地跡地となり、移転は平成12～14年となった。しかしながら、実際の移転は大幅に遅れた。平成16年からの国立大学等の法人化により、4つの大学共同利用機関法人が設置され、立川に予定されている3研究所は異なる二つの法人に組織され、「立川移転2機構事務連絡会」、「立川移転2機構課長連絡会」等を設置して、協議が進められた。平成16年度には総合研究棟Ⅰ（主に、国

文学研究資料館）の建築工事に着手、平成 18 年度には総合研究棟Ⅱ（極地研及び統数研）の建設工事に着手、20 年度には極地研所属の極地観測棟の建設が着手され、平成 21 年 5 月に極地研、10 月には統数研の移転が完了した。なお、計画段階で総合研究棟Ⅰ、Ⅱ、極地観測棟の建設に引き続き、展示施設、講堂、食堂、宿泊施設を含む建物（交流棟Ⅰ、Ⅱ）が計画されていたが、予算確保がならず、当初計画の建物取得は実現できなかった。しかしながら、平成 21 年度に入ってから、それらの建造物の必要性が強く叫ばれ、結果的に 2 研究所自らの経費を当てて、規模を大幅に縮小した宿泊施設とミュージアムが建設されることになった。



立川に移転した国立極地研究所。総合研究棟と極地観測棟（左奥）（2009 年）

### 移転時のアーカイブ作業

極地研の立川移転に伴うアーカイブの収集活動は、平成 20 年 10 月 16 日、極地研で開催された「総研大アーカイブズ研究会」、また、同年 12 月 16 日、日本橋の八重洲ホールで開催された総研大学術映像教育に関する研究会に端を発している。両研究会の参加者は極地研に対してアーカイブが移転の際に散逸しないように、何らかの対策を講じる事を要望したが、この時期の極地研は平成 21 年 4 月に予定されている立川移転に向けて、多くの物資の梱包準備が始まっている段階であった。また、すでに南極に向けて出発した観測隊員や調査などで不在の職員はすでに梱包作業を完了し、ダンボールを積み上げている状況であった。緊急に設置

## 第1章 基盤機関アーカイブズの構築

された「所長室会議ワーキンググループ」は全職員に向けて、アーカイブとは何かに始まる初歩的な説明を繰り返した。アーカイブの取り扱いでは、個人アーカイブと共通アーカイブを区別して梱包作業を開始することを指示した。すなわち、個人アーカイブとは、個人が所有していた資料であるが、アーカイブとして価値があると思われるので、個人の管理から切り離して研究所管理の資料として扱うべき物である。一方、共通アーカイブとは、本来、各部署、センター、図書室等が業務の一環として収集、整理、保存していたアーカイブをいう。当然ながら、部署、各センターなどが、責任を持ってこれまでに保存していた資料を梱包し、輸送する事になる。

実際は、アーカイブと廃棄物の境界は明瞭ではなく、その判断は容易ではない。十分なアーカイブの定義、趣旨を理解したうえで、各個人、各センター、部署の判断にゆだねるしかないのであるが、とくに捨てるべきか、持ち運ぶべきかを迷った場合は、すかさず持ち運ぶということに対応してもらうことにした。このように出来るだけ多くのアーカイブ資料を移転先まで輸送するという体制をとることにした。

アーカイブとして所蔵すべき資料は、非公文書（非現用法人文書）、刊行物、写真・図版、個人資料等であるが、極地研特有の観測機材、防寒衣類、設営装備なども含んでいる。極端なものでは40年前に極点旅行に活躍した雪上車なども含まれる。公文書については情報・システム研究機構には「公文書管理規定（平成16年制定）」があるが、極地研の法人文書とは職員が職務上作成し、または取得した文書、図面、電磁的記録等、職員が組織的に用いるものとして、研究所が保有しているものを指す。法人文書のうち、保存期間の過ぎた資料は廃棄されることが普通であるが、非現用法人文書としてアーカイブの対象になる。アーカイブとして保存が必要なもの、価値があるものを判断することは実は大変重要なことである。これらは南極観測に関連した文書をはじめ、研究所内の会議記録、予算・決算の関係書類、文部省、文科省、他機関、大学との往復書簡等、管理局局で日々作られていたものを含む。刊行物は、年報、



年史、沿革史などの歴史書、規程集、広報誌等の定期刊行物、共同研究報告書等研究活動に関する報告書、パンフレット類等を含む。写真・図版は研究所の前身である科学博物館時代からの建築物の写真・図面・図版等、研究施設内の研究機器の写真、フィルム映像等である。最後の個人資料とは、歴代の所長や退職した職員の書類、メモ類、写真などを含み、また研究所以外から提供を受けた個人、団体からの資料の収集、保存すべきものをいう。

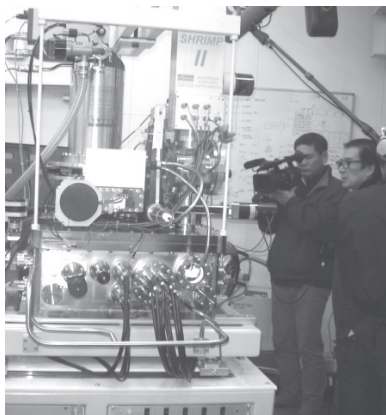
極地研とその前身の科学博物館時代に収集したアーカイブは、すでにアーカイブ資料として保存済みである。板橋から輸送した資料はダンボールで150 梱、すでに外部倉庫に集積してある約 50 梱と合わせ、約 200 梱のアーカイブ資料が集まった。現在、これらの資料の整理、選別作業については、立川移転に伴う文書・物品のアーカイブに関するワーキンググループを中心に、検討が始まっている。また、南極観測 50 周年を機に、南極 OB 会がアーカイブ委員会を立ち上げ、隊員所有の歴史文書や写真等の収集を事業として進めており、整理のついた資料は極地研に移管となる予定である。大学共同利用機関では現在、公開されている施設として、核融合科学研究所の核融合アーカイブ室、分子科学研究所の史料編纂室、高エネルギー加速器研究機構の史料室、生理学研究所の点検連携資料室、国立天文台のすばる資料室などがある。極地研のアーカイブ室はこの度の立川移転を機会に、平成 22 年度の設置予定で準備が進んでいる。

### 板橋時代の映像記録について

前述したように、平成 20 年 12 月 16 日、日本橋の八重洲ホールで開催された総研大学術映像教育に関する研究会において、極地研の映像記録の現況を紹介したが、極地研の移転によってアーカイブ資料が散逸する恐れがあることから、その対策について専門家の貴重な意見を拝聴した。この会の後、研究会の総合司会を務めておられた総研大の平田光司先生から、南極観測事業の 50 年の歴史を背負ってきた極地研が板橋に 36 年

## 第1章 基盤機関アーカイブズの構築

間住み続けた証を、映像で記録できないかというお話があった。これは総研大の「大学共同利用機関の歴史とアーカイブズ」研究会からの提案であった。私は板橋の極地研そのものが、もはや貴重なアーカイブの対象になっていることをこれまでに考えてもいなかった。所長の賛同が得られ、極地研職員に、国立極地研究所の板橋時代の記録を撮る計画について説明した。この企画は移転で各研究グループの実験室、分析室、研究室、その他の機材、物資、及び事務系各室が大きく動かないうちに、映像記録を撮るというものであった。撮影に1月27～29日の3日間を充てた。映像撮影の指揮を執られた大森康宏先生（立命館大学教授、民博名誉教授）の巧妙なインタビューによって、映像の節々に、研究者、職員、学生の生の声を入れた。大森先生のお考えで、撮影のポイントは「現場」、「もの」、「ひと」を同時に記録していくことであった。また、撮影は映像会社エспаが、撮影の企画、交渉は村尾静二さん（総研大高等研究センター）が担当した。



映像記録風景 左：二次イオン質量分析計（シュリンプ）右：超高層グループ作業室

撮影の対象は、建物の外観と敷地（通用門、前庭）から始まって、極域データセンター（オーロラデータセンター、計算機室）、極域科学資源センター（隕石ラボラトリー、雪氷ラボラトリー、生物資料室、岩



石資料室、分析室、低温室）、南極推進センター（観測隊事務室、作業室）、南極観測センター等の各施設、基盤研究グループ（宙空圏、気水圏、地圏、生物圏、極地工学）、情報図書室、広報室（展示ホール、一般資料室）、国際企画室、各研究プロジェクト研究室、大学院生室、所長室、副所長室、事務系各室、会議室、観測倉庫に至るまで隅々と撮影を行った。その後の編集作業を経て、最終的には、長編のアーカイブ版と簡潔版の二つの作品ができた。長編のアーカイブ版は、撮影した人の声と映像が収められており、アーカイブ的価値の高いものである。板橋時代の映像記録はすべてこの版に収録されている。この作品は数時間に及び、DVDにして4枚になった。また、インタビューに答えたすべての研究者、職員の声を書き起こしたものを用意し、実際に話しをした本人による内容チェックと、出演者としての肖像権に関する承諾書の署名なども施した。一方、簡潔版は30分程度の短いものであるが、一種の映画編集に近い作業があり、時間をかけた意見のやりとりがあった。

こうして、板橋時代の極地研の研究活動の証としての映像記録アーカイブが完成した。今後、極地研が年月を重ねるほどにこの映像価値が高まる事は言うまでもない。

## 参考資料

- [1]藤井理行. ありがとう、板橋. 極地研ニュース, 189, 2-3 (2009).
- [2]本吉洋一. 極地研立川キャンパスの紹介. 極地研ニュース, 191, 2-3 (2009).
- [3]神田啓史. 国立極地研究所の移転. 南極OB会会報, 6, 8-9 (2009).
- [4]吉田栄夫. 国立極地研究所の立川移転. 極地, 45 (2), 78-79 (2009).
- [5]神田啓史. 板橋時代の国立極地研究所の映像記録について. 共同利用機関の歴史とアーカイブズ 2008, 53-66 (2008).
- [6]国立極地研究所. 国立極地研究所 25年のあゆみ. 137pp (1998).
- [7]中西 満. 国立極地研究所の立川移転. 極地研ニュース, 184, 9 (2007).